

Tillotson と Fielding

—Fielding 研究者への提言—

南 井 正 廣

I

1934年にR.S.Craneは、18世紀中葉のイギリス文学思潮に“Universal benevolence,” “Benevolence as feeling,” “Benevolent feeling as ‘natural’ to man,” “Self-approving Joy”といった人間観や倫理観をもたらす原動力になったのは、Shaftesburyの哲学ではなく、John TillotsonやIsaac Barrowをその代表とするLatitudinarian派の説教（会衆に直接語りかけるものであれ、出版されたものであれ）であると主張した。¹ それ以来、彼の説は広範囲に渡って多大な影響力を及ぼし、今世紀の英文学研究者が18世紀のこの分野に関して立論する際には、常に“the final word”²として利用されてきた。Fielding研究の分野もその例外ではなく、Martin C. Battestinはその著書*The Moral Basis of Fielding's Art* (1959)の中で、“The MODIFIED Pelagian doctrine of such latitudinarian churchmen as Isaac Barrow, John Tillotson, Samuel Clarke, and Benjamin Hoadly ... is essential background for a right interpretation of his [Fielding's] ethics in general ...”³と指摘しているし、Pat Rogersも“Fielding's genuine commitment to latitudinarian Anglicanism (which meant ... a readiness to see man as possessing natural and spontaneous urges towards benevolence and sympathy)”⁴と論評している。確かに、FieldingがLatitudinarian派から受けた影響の大きさに関しては誰も否定することができない。しかしながら、例えば、“Good nature”というFieldingの倫理思想の根幹をなすキーワードを取り上げてみても、その概

念形成に Latitudinarian 派の神学者たちの説教が多大な貢献をしていることを認めるのにやぶさかではないが、Cicero や Aristotle, Plato といったギリシャ・ローマの哲学者の思想や Shaftesbury の哲学からの影響も無視することはできない。つまり、Fielding の小説の背後にある倫理想の形成に当たって、Latitudinarian 派の神学者たちの思想が不可欠のものであったことには疑いの余地がないが、だからといって、Latitudinarian 派の思想と Fielding のそれがすべての面で重なり合っていると言い切ることもできない。従来の論考では、Fielding の小説の背後にある人間観、道徳観が Barrow や Tillotson のどの説教に対応しているのかという面ばかりが強調され、その違いがどこにあるのかという問題意識が欠落してきたように思われる。本稿では、Latitudinarian 派の神学者の中でも、その説教が18世紀を通して最も多く読まれ、最も大きな影響を及ぼしてきたと考えられる、John Tillotson (1630-1694) に焦点を当てて、Fielding 研究者が見ている Tillotson と Tillotson の実像とのズレを明らかにし、このようなズレが生じてくる諸要因を考察の対象としていきたい。

II

Tillotson の実像に迫る前に、彼や Barrow に代表される Latitudinarian 派の神学者たちの主義信条が、従来 Fielding 研究者によってどのように理解され、どのような点で Fielding の倫理観、人間観に類似している (Fielding が影響を受けていることは言うまでもないが) と考えられてきたのかを概観しておく必要がある。ここでは最も典型的な Latitudinarianism 観として、Battestin の見解⁵を取り上げてみる。

Battestin によれば、Latitudinarianism は、17世紀後半に台頭してきた、Hobbes の思想(自然状態の人間は反目しあい、争い合う)、新ストア主義(何事にも無感覚で超然としていることを理想とする)、当時英国教会でオーソドックスと考えられていた、カルヴィン主義的 Antinomianism (信仰至上主義、無律法主義)への反発として登場した。神学上の問題に限って論じてお

くと、Latitudinarian 派の神学者たちが反発したカルヴィン主義的見解というのは、宗教改革時に英国国教会が発表し 17 世紀の後半の時点での英国国教会の教義上の立場を明らかにしている 39 の信仰箇条 (Thirty-nine Articles)⁶ の中の以下の 4 点——“natural depravity” (Article IX), “justification by faith only” (Article, X), “the insufficiency of good works” (XII-XIII), “predestination” (Article, XVII)——に要約することができる。この信仰箇条は Calvin や Augustine の伝統に根づいたもので、彼らによれば、人間は生来堕落していて、堕落した人間が神に義認 (罪なしと) されるのは、善行によってではなく、信仰のみによってであり、また、あらかじめ神によって選ばれたものだけが救われるということになる。このような時代の趨勢に対して、Latitudinarian の神学者たちはどのような独自の見解を提示したのであろうか。

まず「人間が生まれつき堕落したものである」というテーゼに対して、彼らは、“The naturalness of the social affection and man’s capacity for moral perfection”⁷ という非常に楽観的な人間観を提示した。例えば、Barrow は人間本来の性質とその堕落の原因を以下のように記している。

There do remain, dispersed in the soil of human nature, divers seeds of goodness, of benignity, of ingenuity, which being cherished, excited, and quickened by good culture, do, to common experience, thrust out flowers very lovely, yield fruits very pleasant of virtue and goodness. . . . In fine, the wisest observers of man’s nature have pronounced him to be a creature gentle and sociable, inclinable to and fit for conversation, apt to keep good order, to observe rules of justice, to embrace any sort of virtue, if well managed, if instructed by good discipline, if guided by good example, if living under the influence of wise laws and virtuous governors. . . . all perverse and intractable, all mischievous and vicious dispositions, do grow among men . . . and overspread the earth, from neglect of good education; from ill conduct, ill

custom, ill example . . .⁸

この点に関しては、Tillotson も、“nothing is more unnatural than sin; ‘tis not according to our original nature and frame, but it is the corruption and depravation of it, a second nature superinduced upon us by custom.”⁹と主張していて、Barrow と同じである。Fielding は *Amelia* で自分の代弁者である Dr. Harrison にこの典型的な Latitudinarian 派の見解にそっくりな発言——“The Nature of Man is far from being in itself Evil: It abounds with Benevolence, Charity and Pity, coveting Praise and Honour, and shunning Shame and Disgrace. Bad Education, bad Habits, and bad Customs, debauch our Nature and drive it Headlong as it were into Vice.”¹⁰——をさせているくらいだから、Fielding 研究者が Fielding の倫理思想が Barrow や Tillotson の説教の内容にぴったり一致すると考えるのも無理はない。

次いで、39の信仰箇条の中の「信仰のみによる義認」、「善行の不十分さ」といった項目に対して、Latitudinarian 派の神学者たちが、charity の実践を教えの核にしていた点を Battestin は取り上げる。人間は、たとえ生来善良な性質であっても、困っている人々を助けるとった善行を積み重ねないならば救われないという考えで、とりわけ charity が、“the sum of religion and the indispensable duty of every Christian”¹¹とみなされているのである。また、ここで彼らの言う charity とは、単なる施しだけを意味するのではなく、精神面で人を助けることをも意味し、人類全体をその対象とするものである。¹² charity の実行が伴わなければ、典礼もキリスト教に関する知識も救いにはつながらない。Battestin は、Tillotson の言葉として次の一節を引用している。

The knowledge of Religion is only in order to the practice of it [a good life]; and an Article or Proposition of Faith is an idle thing, if it do not produce such actions as the belief of such a Proposition doth require.¹³

Battestin は、このように人間が神をたやすく信じることや信仰を告白することによってではなく、生活の中で行われた善行によって裁かれるという Latitudinarian 派の道德重視の傾向を “the MODIFIED Pelagian doctrine” あるいは “this Pelagian doctrine” という名称で呼んでいる。ペラギウス主義では、人間が救われるのは自らの主体的行動、努力(道德行為)によるのであって、神の恩寵によるのではないことが強調されているからである。しかし、その教義は有名な Augustine との論争を経て、418年にカルタゴの公会議で異端と判定された。17世紀後半から18世紀の中頃にかけて英国国教会でかなりの影響力を誇った一大勢力に、過去に異端とされた教義の名を冠するというのは妙な気がするが、Battestin は Roland N. Stromberg の見解を拠り所として、“the classic example of a Christianity stressing God too little and Man too much”¹⁴ という意味で、Pelagianism, Socinianism, Arminianism といった名称をあまり区別せずに用いている。この呼称の妥当性に関しては次章で検討する。

Latitudinarian 派が主張する、善行の積み重ね、charity の実践というコンセプトは、Fielding の小説の中でも存分に活かされている。とりわけ、*Joseph Andrews* では、charity を行える人であるのかが善人と悪人(諷刺の対象とされる人物)を見極めるためのキーとなっている。宿屋の支払いができない Parson Adams は、“a Brother in the Parish, who would defray the Reckoning”¹⁵ として、近隣に住む Parson Trulliber に援助を求めるが、「強盗」、「無頼漢」呼ばわりされて追い出されそうになる。Adams は、“I am sorry ... that you do know what Charity is since you practise it no better; I must tell you, if you trust to your Knowledge for your Justification, you will find yourself deceiv'd, tho' you should add Faith to it without good Works.” (JA, 167) と反論する。にもかかわらず、一向に相手に通じないので、一層 Latitudinarian 的な発言——Now, there is no Command more express, no Duty more frequently enjoined than Charity. Whoever therefore is void of Charity, I make no scruple of pronouncing that he is no

Christian.” (JA, 167) ——をすることになる。さらに、Parson Adams と Booby 家の執事である Peter Pounce との会話においても、同じような主旨の問答が繰り返される。Adams が、“Riches without Charity were nothing worth.” (JA, 274) と言うと、その執事は、Adams の charity 観は紳士にふさわしいものでなく牧師向きのものであるとやり返す。“my Definition of Charity is a generous Disposition to relieve the Distressed.” (JA, 274) と Adams が続けても、Peter は、“There is something in that Definition ... which I like well enough; it is ... a Disposition — and does not so much consist in the Act as in the Disposition to do it ...” (JA, 274) と述べて、実行の大切さは認めない様子で、二人の議論は噛み合わぬままに終わる。このような例から判断すると、Latitudinarian 派の主張は、Fielding の倫理思想の形成に決定的な影響を与えていたと考えて間違いなさそうである。人間が神によって義認され救われるためには、単なる信仰心や知識だけでは不十分であって、善き行いの実行、中でも charity の実践が不可欠のものであることが、Fielding の小説においても明らかにされているからである。

英国国教会の信仰箇条と銘記された「予定説」にも Latitudinarian 派が反発していたことは先述したが、この問題もここでもう少し掘り下げておいて、Latitudinarian 派の態度を一層鮮明なものにしておきたい。「予定説」というのは、神の意志と目的によってあらかじめ選ばれた人たちだけが（万人ではなく）イエス・キリストの名において救われるとする教義¹⁶で Calvin 派が強く主張していたものである。彼らにとっては、いくら行いが正しくとも異教徒は救われる見込みのない存在である。この「予定説」に対して、Tillotson は以下のような自説を展開している。

I know no such Error and Heresie as a wicked life. That Man believes the Gospel best, who lives most according to it. ... I had rather a Man should deny the satisfaction of Christ; than believe it, and abuse it to the

encouragement of sin. Of the two I have more hopes of him that denies the divinity of Christ, and lives otherwise soberly, and righteously, and godly in the World, than of the Man who owns Christ to be the Son of God, and lives like a Child of the Devil.

Such a Faith as hath not an answerable life, will be ineffectual to the purpose of Justification and Salvation.¹⁷

この説教の主旨も、やはり、Fieldingによって咀嚼され、彼の小説の中にはめ込まれている。Parson Adamsは、Parson Barnabas及び説教をあまり出版しなかった本屋との対談の中で、善行ではなく熱心な信仰心のみ「救い」や「義認」が依拠しているメソジスト派のWhitefieldの教義を、“That Doctrine was coined in Hell, and one would think none but the Devil himself could have the Confidence to preach it”(JA, 82)と断罪した後で、次のように持説を述べている。

Ay, Sir, ... the contrary, I thank Heaven, is inculcated in almost every page, or I should belye my own Opinion, which hath always been, that a virtuous and good *Turk*, or *Heathen*, are more acceptable in the sight of Creator, than a vicious and wicked Christian, tho' his Faith was as perfectly Orthodox as *St. Paul's* himself.” (JA, 82)

このように、「予定説」に関しても、FieldingとTillotsonの見解は見事に一致している。彼らは、神の存在を認めながらも、キリスト教の中の奇跡や超自然的な力を確信する宗教的熱情を排除し、あくまでも道徳の実践を通してのみ人は—キリスト教徒だけでなく万人が—救われると説く。Fieldingは「救いは神からの無償の贈り物」と考え、“justification by faith only”という教義を主張し続けたメソジスト派を小説の中で揶揄や諷刺の対象にし続けた。

一方、Tillotson の方は、反対に、善良さや慈善行為のみを強調して、“the dry husks of dead morality”¹⁸ を教えるだけの説教者であり、洗練された理神論者にすぎないという理由で、Whitefield の非難にさらされている。彼らは共に、宗教的熱情や faith という側面を軽視し、道徳的实践のみを「救い」へ至る道と捉えた点で、メソジスト派に対峙している。この観点のみから見れば、Latitudinarian 派の影響下にあった Fielding の倫理想は、Tillotson のそれと全く変わりがないことになる。

III

Tillotson の教義は、Crane や Battestin の研究を通して見る限り、Fielding が小説において読者に伝えようとする道德観、人間観の源泉であるように思われる。しかしながら、Battestin に Latitudinarian 派を解釈するための指針を与えたと推定できる Crane の論文自体が見直されるべき内容を含んでいることは、1977年に Donald Greene が Crane 説への反論として発表した論文¹⁹に示されている。また、Frans De Bruyn は1981年に発表した論文で、Greene の論文の問題点を指摘し、Anglicanism に関する最新の研究成果を盛り込んで、Latitudinarian 派を Pelagianism ではなく、Arminianism と関連づけることで、Crane 説を再検討している。²⁰ Crane の論文が発表されて40年以上経過しているにも関わらず、今なお Latitudinarian 派をどう解釈するべきかが問題となっていることは、ひとえに彼らの思想のわかりにくさ、振幅の大きさ(同じ主義信条を有する神学者たちが意識して Latitudinarian 派というグループを作ったのではないから)を物語っているのに他ならない。Greene や De Bruyn の論文は非常に示唆に富む内容であり、彼らの議論は本稿においても取り扱われる。しかし、彼らが Latitudinarian 派全体を議論の対象とし、Fielding と Tillotson の関係という個別の問題を詳しくカバーしているのではなく、また、彼らの結論が私の解釈と完全に合致するものでない以上、全面的に彼らに頼ることはできない。この章では、あくまでも Tillotson の説教のみをベース

にして、Crane や Battestin が理解していたのとは違う Tillotson 像を浮かび上がらせてみたい。

Crane や Battestin は、Latitudinarian 派の神学者たちが Hobbes 的な人間観への反発として、楽観的な “natural goodness” を主張していることを議論の出発点にしているが、これは全面的に肯定できることなのであろうか。例えば、Tillotson が別の説教で “the Corruption and Impotency of Human Nature” や原罪について語っていることを Crane や Battestin は見落としている。Tillotson は我々がキリストにふさわしい生活をする際に何故超自然的な助力、超自然的な恩寵を必要とするのかを説明する際に、人間の生来の墮落やアダムの原罪について次のように述べている。

This [the Corruption and Impotency of Human Nature] the Light of Nature cannot but acknowledge. The Philosophers and wise Men among the Heathen, were sensible of a great depravation in our Souls, and degeneracy from the Divine Life ... but they were wholly ignorant from whence this Depravation came. ... They could not imagine that our Souls came impure out of God's hands; and to avoid that inconvenience, they imagined a former State wherein they had sinned. And this was the best account they could give of the general depravation of Mankind.

But the Scripture hath given us a more certain account of this; that *by one man sin enter'd into the world, and death by sin*. This is the true source and original of the universal degeneracy of mankind, and of the weakness and impotency of Human Nature. The fall of our first Parents hath derived Corruption and Weakness upon the whole Race and posterity of *Adam*; for *whatsoever is born of the flesh, is flesh*.²¹

人間性を楽観的な目で見ていくことは Latitudinarian 派の専売特許であり、こ

の発言があるからと言って Crane や Battestin が主張しているような Latitudinarian 派に共通した楽観的な人間観がすべて打ち消される訳ではない。Tillotson が Hobbes の人間観に反対して、“*That Men are naturally a-kin and Friends to each other.*”²² という Aristotle のそれを支持したことは確かである。しかし、その一方で、Tillotson が、Hobbes や Calvin 派のプロテスタントと同様に、自然状態の人間の邪悪さ、弱さを認めることも忘れてはいない。つまり、人間に善良さや慈愛が先天的に備わっていることをのみを主張していたのではないことになる。

先に引用した人間性の生来の墮落や弱さについての Tillotson の発言は、また別の面で Battestin の Latitudinarianism 観を揺るがすことになる。Tillotson は先の発言を、人間がこのような墮落した弱い存在であるうえに、後天的な悪習慣が身に染まってしまっているから、神による超自然的な恩寵や助力なしでは（自力では）人間は自らを改め、善の道を歩み続けることはできないというというコンテクストで行っている。だとすれば、Battestin のように、Tillotson の教えを“MODIFIED Pelagian doctrine”とか“Pelagianism”と決めつけてしまうことには疑義がある。原罪を肯定し（ペラギウス主義では否定）、人間の自力での救済が否定されているのだから、ここでの Tillotson の見解はペラギウス主義ではありえない。次の一節を読めば、ペラギウス主義と Tillotson の思想との距離が明らかになる。

But this is *Pelagianism*, to say that of our selves we can Repent and turn to God. And who says we can of *our selves* do this besides the *Pelagians*? We affirm the necessity of God’s Grace hereto, and withall, the necessity of our *co-operating* with the Grace of God. We say that without the powerful excitation and aid of God’s Grace, no Man can Repent and turn to God; but we say likewise, that God cannot be properly said to *aid* and *assist* those, who do nothing themselves.²³

ここでの Tillotson は、人間の側の努力だけでは悔い改めたり、神に向かうことはできないという点で、ペラギウス主義者や Battestin の知っている Tillotson とは異なる。しかし、同時に、人間の側が何の努力をしなくても、ただ神の恩寵を信ずるだけで助けてもらえるという Antinomianism への牽制も忘れていない。別の説教での発言内容 — “It [the Grace of God] strengthens and assists us; but does not produce the whole effect, without any activity and endeavour of ours.”²⁴ — も同じ主旨で述べられている。結局、Tillotson の説くところは神の教えに従って善人の生活をしようと努力する人間と、人間を助けようとする神との協同作業だったのである。この意味では彼の教義は非常にバランスのとれたものであったと言える。

人間の側の努力という問題になると、Tillotson が good works や charity と faith の関係をどのように位置づけていたのかということも気になってくる。Battestin はこの問題に関して、“these rational divines [the Latitudinarians] stood staunchly with St. James against St. Paul.”²⁵ と簡単に片づけてしまっているが、果たして Tillotson の場合に Battestin の読みが当てはまるのであろうか。この議論を進める前に、Battestin の文中に見られる St. James と St. Paul に関わる論争について解説しておく必要がある。St. James は

What *doth* it profit, my brethren, though a man say he hath faith, and have not works? Can faith save him?... faith, if it hath not works, is dead, being alone. ... But wilt thou know, O vain man, that faith without works is dead? Was not Abraham our father justified by works, when he had offered Isaac his son upon the altar? ... as the body without the spirit is dead, so faith without works is dead also.²⁶

と語って、人間が works によって義認され、faith には works が不可欠である

ことを説いている。他方、St. Paul は、次の二つの発言 — “Knowing that a man is not justified by the works of the law, but by the faith of Jesus Christ, even we have belived in Jesus Christ ...”²⁷ と “a man is justified by faith without the deeds of the law.”²⁸ — が示すように、faith の重要性を絶対視して St. James の主張と真っ向から対立している。Battestin はこの論争を “the bitterly debated question of the relative importance of faith or works”²⁹ と要約し、Latitudinarian 派の神学者たちが St. James の側に味方したと解釈しているのである。

Tillotson は、この問題に “St. Paul and St. James reconcil'd” というサブタイトルを付けて、真正面から取り組んでいる。罪人はキリスト教徒としての faith を表明することで、神によって罪を許され認められるようになるが、その際には正しい行ないを先立たせる必要はないという St. Paul の主張と、good works をもたらさぬような faith の持ち主は神に義とされないという St. James の主張とを Tillotson は整合させようとする。以下がこの論争に対する Tillotson の結論である。

Tho' we be justified at first by Faith without works preceeding, yet Faith without good works following it will not finally justifie and save us; ... Faith which does not bring forth the Fruits of a good life, was never a true, and living, and perfect Faith; but pretended, and dead, and imperfect, and therefore can justifie no man³⁰

Tillotson には、“Of the Necessity of Good Works” や “Of doing Good” と名付けられた説教があつて、彼が good works や charity を繰り返し奨励し続けたことは確かである。しかし、だからといって、彼が St. James の教えのみに加担していたと考えるのは早計であろう。ペラギウス主義への態度と同様に、ここでも、Tillotson は抜群のバランス感覚を示している。

従来の Tillotson 研究では、St. James 的な面ばかりが強調されて、St. Paul

の主張——イエス・キリストを信じることのみによって罪人が義とされること——をも彼が受け入れていたことは殆ど取り上げられなかった。しかしながら、Fielding 研究者は誰も指摘していないが、Tillotson は、新約聖書の「ヘブライ人への手紙」第11章 6 節 “But without Faith it is impossible to please God.” について 6 回連続で説教をし、「faith とは何か」を自然宗教からキリスト教の超自然的な教義を確信することをも含めて論じ、「faith なしでは如何なる宗教も成り立たぬこと」を説いている。³¹ さらに、彼は “The Fruits of the Spirit, the same with Moral Virtues” という説教で、道徳の実践の大切さを強調しつつも、faith がなければ、宗教行動の根本原則にもとることを力説する：

I do not say that these Virtues are all Religion, and all that is necessary to make a Man a compleat Christian, and good Man. For there must be Knowledge to direct us in our Duty; there must be Faith or hearty Assent to the Revelation of the Gospel, (especially concerning the Forgiveness of our sins, and of our Justification and acceptance with God, for the sake of the meritorious Sufferings of our Blessed Saviour,) to be the Root and Principle of all Religious Actions³²

救世主キリストの尊い犠牲のおかげで、我々の罪が許され、我々が義とされ神に受け入れられるという超自然的な教えを心から確信しないならば、完全なクリスチャン、善き人とはなりえないのである。ここでも、「Tillotson がペラギウス主義者であるのかどうか」を論じた際の結論が生きてくる。人間は弱い無力な存在なので “the supernatural Grace and Assistance of Christ”³³ を確信して神に助けをもらうが、人間の側も努力を怠ってはならない。この神と人間との協同作業こそが Tillotson 神学の中心軸であろう。彼は、従来指摘されてきたような「道徳屋」ではなかったのである。

Frans De Bruyn はこの神と人間との協力関係を “Arminian position”³⁴ と呼

んでいる。確かに、Tillotson が、異教徒の善人が救われることを肯定³⁵していることは、カルヴァン主義者の「予定説」を否定することにつながっていくし、神と人間との協同作業という考え方には、人間の自由意志が十分に反映されているわけで、³⁶ これら二点から判断すると、Tillotson の教義が Arminianism に傾斜していたことは否定できない。しかしながら、Tillotson は、Socinianism や Arminianism をローマ・カトリックと同列に扱い³⁷、自分の教義とは区別している。特に“the Socinian doctrine”に関しては、自分ほどその教派を悪くしているものもないとまで言っている。³⁸ Tillotson の死後、Benjamin Hoadly や Samuel Clarke といった彼の後継者が、さらに“liberal Arminian outlook”³⁹を発表し続けたので、先輩格の Barrow や Tillotson も後代から同じ目で見られ、同じ呼び方をされたと考える方が無難であろう。

IV

最後に、Tillotson の説教が Fielding の時代にどのように読まれてのかを検討し、Tillotson と Fielding との関係を整理し直してこの小論を終わりにしたい。Tillotson の説教は、彼が死んだ1694年以降も読まれ続け、田舎牧師たちが彼の説教の言い回しを一語一語何カ所にも渡って借用していたことも報告されている。⁴⁰ しかし、彼がそのすべての説教を通して伝えたかった教義全般がバランスよく18世紀のイギリス社会に受容されたのではなかった。彼の人気の秘密は、専門用語を使って宗教の思弁的な側面を論じた点にあるのではなく、“so simple and elegant, so candid, rational and clear”⁴¹ と評された文体で、実践道徳をわかりやすく説いた説教が当時の社会の要請に合致したことにある。つまり、宗教闘争に明け暮れた17世紀の教会に幻滅した人々には、Hobbes の性悪説的な人間観に走るか、宗教的熱狂に走るかしか選択肢がなかった。そんな彼らにとって、神の超自然的な助力だけではなく、人間の側の努力(道徳行為や charity)を強調し、また科学論文を思わせるようなやさしくわかりやすい言葉で書かれた Tillotson の説教は魅力的であったろう。し

かし、Tillotson の教義そのものは元来非常にバランスのとれたものであったにもかかわらず、18世紀になって彼の説教が出版され、ベストセラーとなっていく過程で、人々に理解のしやすい、また、他の Latitudinarian 派の神学者たちも熱心に説いていた道德の奨励という面のみが強調されるようになっていった。宗教学者 Gerald R. Cragg の、“Tillotson was dead, but his sermons were the ethical handbook of the new age, and on this point he was perfectly explicit.”⁴² という指摘は正しい。Tillotson を含めた Latitudinarian 派の驚異的な広がり方とその問題点は Cragg の次の言葉に集約されている。

If success be measured by widespread influence, the Latitudinarians could claim to have achieved it to an extraordinary degree. The echoes of their teaching were heard in many a country pulpit, and all over England the grandeurs of Christianity were reduced to the modest proportions of prudential ethics.⁴³

Tillotson の教義はイギリス中に広まったが、もはや宗教としての威光のない道德屋としての部分的な勝利を意味したにすぎない。しかし、このような Tillotson の人気は、当時のオーソドックスな宗教を支持していたグループや、Whitefield や Wesley といった一流の説教師が率いていた新興勢力であるメソジスト派にとって、大きな脅威であったにちがいない。メソジスト派が Tillotson を執拗なまでに攻撃したことは、彼の人気を逆の意味で裏付けてくれている。

Tillotson の説教の道德的側面が18世紀のイギリスで広く受け入れられていたことは Fielding とも無関係ではないだろう。第二章で明らかにしたように、Fielding が Parson Adams や Dr. Harrison に代弁させた道德観や倫理観には Tillotson の影響がいくつも見られ、その影響が Tillotson の道德的な側面に限定されていることを当時の社会の風潮、Tillotson が受けていた社会的評価

という観点から説明することも不可能ではないであろう。しかし、Fielding が自らの小説の世界を通して読者に伝えようとしたモラル・レッスンは Tillotson の説いていた道徳や倫理に一致するからと言って、彼が世間の風潮のみに流されたとは考えにくい。学識があり、Barrow や Tillotson を尊敬していた Fielding が Tillotson の説教を読まなかったはずがない。Joseph Andrews 中の Parson Barbanas の Tillotson 評 — “And as for *Tillotson*, to be sure he was a good Writer, and said things very well: but Comparisons are odious . . .” (76) — などは、実際に読んだ者でないと書けない。そうになると、Tillotson の説教の中の神の超自然的な恩寵や助力やそれを確信することの大切さを説いた一説も Fielding は当然知っていたことになる。事実、彼は *The Champion* の中で Tillotson が「魂の不滅」や「来世への確信」を見事に証明したことと言及している。⁴⁴ しかも、Fielding がここで言及している Tillotson の一節は faith に関する説教に含まれているものである。⁴⁵ にもかかわらず、彼は Tillotson の主張の一部である “the supernatural aid of the Grace” への faith に関しては沈黙している。Fielding はどうして道徳的側面のみを強調したのであろうか。ここに Fielding の取捨選択が作用しているように思えてならない。彼は Tillotson の説教の中でも自分の小説の世界を通して読者に伝えようとした道徳観、倫理観に一致するものだけを利用したにすぎないのではないだろうか。Eton 校に進学し、Leyden 大学にも留学した経験のある彼は、西洋古典、イギリス道徳感覚学派の哲学 (Shaftesbury)、Latitudinarian 派の教義のすべてに通じていた。しかし、彼の道徳思想はそのいずれとも似て非なるものなのであって、それぞれに関して類似点と相違点が見られる。つまり、知る限りのあらゆる知的なソースから、自分が共鳴でき、自分のモラル・インストラクションの展開上都合のいいものを取り込んでいったのである。となると、Fielding の小説やエッセイのみを通して Tillotson をはじめとする Latitudinarian 派を解釈するのは禁物であろう。Fielding 研究者の多くは、Fielding の個々の発言の出所である説教を突き止める作業にばかり目を奪われてきたから、

Tillotson がその説教のすべてを通して伝えようとした意図を見誤る傾向にある。Tillotson と Fielding の関係を検討することで、Fielding 研究者を待ち受ける陥穽が明らかになった。

注

- 1 R. S. Crane, "Suggestions toward a Genealogy of the 'Man of Feeling'," *ELH*, Vol. 1 (1934), 205-230.
- 2 Donald Greene, "Latitudinarianism and Sensibility: The Genealogy of the 'Man of Feeling' Reconsidered," *Modern Philology*, Vol. 75 (1977), 180.
- 3 Martin C. Battestin, *The Moral Basis of Fielding's Art: A Study of Joseph Andrews* (Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1959), 14.
- 4 Pat Rogers, *The Augustan Vision* (London: Weidenfeld and Nicolson, 1974), 278. この他にも、例えば、Morris Golden は、"In response [to Hobbes] the latitudinarian divines of the late seventeenth and eighteenth centuries, whom Fielding frequently quoted with approval, argued that man was benevolent. In a significant essay, R. S. Crane has sketched the views that united them." と記して、Crane の見解を全面的に受け入れている (*Fielding's Moral Psychology* [Amherst, Mass: University of Massachusetts Press, 1966], 3-4)。
- 5 ここでは、主として Martin C. Battestin の前掲書の第2章(14-25)を参考に議論を進める。
- 6 39の信仰箇条の全文及び解説に関しては、Thomas Rogers の *The Catholic Doctrine of The Church of England, An Exposition of the Thirty-Nine Articles* (Cambridge: The University Press, 1854) が参考になった。
- 7 Martin C. Battestin, 16.
- 8 Isaac Barrow, Sermon VII, "Being of God Proved from the Frame of Human Nature" in *the Works of Isaac Barrow, D. D.* (New York: John C. Riker, 1845), II, 248-249.
- 9 John Tillotson, Sermon IX, "The Difficulties of a Christian Life consider'd" in *Tillotson's Sermons* (London: Ralph Barker, 1704), V, 319.
- 10 Henry Fielding, *Amelia*, ed. Martin C. Battestin (Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1983), 374.
- 11 Martin C. Battestin, 20.
- 12 John Tillotson, Sermon XIV, "Of Doing Good" in *Sermons*, VI, 409-410.
- 13 John Tillotson, Sermon I, "Of the Form, and the Power of Godliness" in *Sermons*, XI, 13.
- 14 Roland N. Stromberg, *Religious Liberalism in Eighteenth-Century England* (Oxford, 1954), 110. この引用文は Battestin の前掲書 (15) から再掲した。

- 15 Henry Fielding, *Joseph Andrews*, ed. Martin C. Battestin (Middletown, Connecticut: Wesleyan University Press, 1967), 161. 以後、この作品はJAと略記し、ここからの引用はすべて括弧内にページ数のみを記す。
- 16 Thomas Rogers, *The Catholic Doctrine of The Church of England, An Exposition of the Thirty-Nine Articles*, 142-144.
- 17 John Tillotson, Sermon X, “The Condition of the Gospel Covenant, and the Merit of Christ, consistent” in *Sermons*, XII, 294-295.
- 18 Martin C. Battestin, 24.
- 19 Donald Greene, *Modern Philology*, Vol. 75 (1977), 159-183.
- 20 Frans De Bruyn, “Latitudinarianism and its Importance as a Precursor of Sensibility,” *JCEP* (1981), Vol. 80, 349-368.
- 21 John Tillotson, Sermon XV, “The Necessity of Supernatural Grace, in order to a Christian Life” in *Sermons*, X, 451-452.
- 22 John Tillotson, *Works*, 4th ed., 1728, I, 305. この説教 (March 8, 1689) は手許の版には掲載されていないので、R. S. Crane の論文 (*ELH*, I, 224) から再掲した。
- 23 John Tillotson, Sermon VI, “Of the Nature of Regeneration, and its Necessity, in order to Justification and Salvation” in *Sermons*, IV, 187.
- 24 John Tillotson, Sermon XV in *Sermons*, X, 457.
- 25 Martin C. Battestin, 18.
- 26 King James Version, James, 2: 14-26.
- 27 King James Version, Galatians, 2: 16.
- 28 King James Version, Romans, 3: 28.
- 29 Martin C. Battestin, 18.
- 30 John Tillotson, Sermon VI, “Of the Necessity of Good Works” in *Sermons*, XI, 171.
- 31 John Tillotson, Sermon I, “Of the Nature of FAITH in general,” Sermon II, “Of a Religious and Divine Faith,” Sermon III & IV, “Of the Faith or Perswasion of a Divine Revelation,” Sermon V, “Of the Testimony of the Spirit, to the Truth of the Gospel,” and Sermon VI, “The Efficacy, Usefulness, and Reasonableness of Divine Faith” in *Sermons*, XII, 1-183.
- 32 John Tillotson, Sermon XIV in *Sermons*, X, 427-428.
- 33 John Tillotson, Sermon XV in *Sermons*, X, 448.
- 34 Frans De Bruyn, 353.
- 35 John Tillotson, Sermon V in *Sermons*, XI, 162.
- 36 こういった Arminian 派の傾向は、Gerald R. Cragg が Calvinism と比較して説明してくれている (*The Church & the Age of Reason 1648-1789* [Harmondsworth, Middlesex: Penguin Books, 1960], 144)。

- 37 John Tillotson, Sermon IX, “Of Justifying Faith” in *Sermons*, XII, 259.
- 38 John Tillotson, Sermon X in *Sermons*, XII, 294.
- 39 Frans De Bruyn, 354.
- 40 *Ibid.*, 362.
- 41 Gerald R. Cragg, *Reason and Authority in the Eighteenth Century* (Cambridge: the University Press, 1964), 20.
- 42 Gerald R. Cragg, *The Church & the Age of Reason 1648-1789*, 159.
- 43 Gerald R. Cragg, *Reason and Authority in the Eighteenth Century*, 59-60.
- 44 Henry Fielding, *The Champion*, Tuesday, January 22 (1739-40) in the *Miscellaneous Writings of The Complete Works of Henry Fielding, ESQ.* ed. William Ernest Henley (New York: Barnes & Noble, 1967), II, 163.
- 45 Tillotson は、「神の存在」、「魂の不滅」、「来世への確信」について、Sermon II, “Of a Religious and Divine Faith” で詳しく論じている (*Sermons*. XII. 29-62)。

Synopsis

Tillotson and Fielding

—Suggestions for Fielding Scholars—

Masahiro Minai

It is often said by Fielding scholars that Fielding was much influenced by the Latitudinarian divines as to his view of human nature and morality. Modern criticism still tends to stress the similarities between Fielding and the rational divines in the late seventeenth century. Martin C. Battestin is a typical example of this type, who makes every effort to find Fielding's sources in a vast number of the Latitudinarian sermons. Careful reading of Fielding's works, however, shows that Fielding's view does not correspond to the Latitudinarians' in all respects; for instance, the knowledge of classics and Shaftesbury's philosophy clearly contribute to forming Fielding's ethical view. More attention should be paid to the differences between Fielding and the Latitudinarians to understand better how Fielding's view was formed and what Fielding's real points were. This paper focuses on John Tillotson (1630-94), Archbishop of Canterbury, who is often regarded as an influential leader of the Latitudinarians, and clarifies the discrepancies between what Tillotson really preached and what Fielding scholars imagine him to be.

Before highlighting Tillotson's sermons, it is necessary to survey the similarities between Fielding and the Latitudinarians and to examine how their Latitudinarian doctrine including Tillotson's has been understood by Fielding scholars. According to Battestin, the Latitudinarian divines argue against the Antinomian and Calvinist position whose main points are located

in the following four of the Thirty-nine Articles (a statement of doctrine issued by the Church of England during the Reformation period): “natural depravity,” “justification by faith only,” “the insufficiency of good works,” and “predestination.” As to the “natural depravity” the Latitudinarians provide such an optimistic view of human beings as “the naturalness of the social affection and man’s capacity for moral perfection.” The Latitudinarians don’t believe in “justification by faith only” and “the insufficiency of good works,” because they think that charity is “the sum of religion and the indispensable duty of every Christian.” In Battestin’s opinion, they tend to give priority to human works instead of God’s supernatural grace in attaining salvation; he even calls their doctrine “the MODIFIED Pelagian” or “Pelagian.” The Latitudinarians deny “predestination” by accepting “a complacent moralism that made salvation universal and largely dependent upon the condition of an active, comprehensive charity.” All these characteristics of the Latitudinarians, which Battestin mentions, can also be found in Tillotson’s sermons. Fielding’s novels also reflect their views. So there seems no doubt of the perfect consistency between Fielding’s ethical and moral view and Tillotson’s doctrine.

The Latitudinarians’ optimistic view of “natural goodness,” Battestin asserts, results from their opposition to Hobbes’ view of human nature. Tillotson agrees to Aristotle’s view and says that men are naturally akin and friends to each other. Strange to say, however, he neglects Tillotson’s references to “the Corruption and Impotency of Human Nature.” This negative view of Tillotson’s leads to his recognition of original sin and to dependence on the supernatural aid of God for salvation. Mentions of this sort never belong to Pelagianism because it attaches far greater importance to human works, than God’s grace, in attaining salvation. On the other hand, Tillotson never forget to stress the effect of men’s endeavors (works). His assertion is more balanced

than Fielding scholars expect, because he tries to emphasize men's "co-operating with grace of God."

Battestin makes use of the bitterly debated question of the relative importance of faith or works — the opposition of St. James to St. Paul — in order to support his opinion that the Latitudinarians believe in justification by (good) works only; he concludes that they "stood staunchly with St. James against St. Paul." This view is not true of Tillotson's case, either. As to this question, Tillotson also gives the well-balanced response that, though men may be justified at first by faith without works preceding, faith without good works following it will not finally justify and save men. It is true that Tillotson preaches the importance of morals and virtues (especially charity) repeatedly, but he firmly believes that men cannot be made complete Christians and good men without faith or their hearty assent to the revelation of the gospel. The core of Tillotson's instruction is the co-operation of men with God. Tillotson is never a preacher who supplies his congregation "only with the dry husks of dead morality."

After Tillotson's death, his sermons continued to attract the Anglican clergy as well as the public. The secret of his popularity lay in his plain and lucid style and in his practical moralizing, both of which reacted to the demand of the scientifically enlightened people who were disgusted with Hobbes' negative view of human nature and Puritanical fanaticism. Those in the eighteenth century, however, paid one-sided attention only to Tillotson's morality, not to his well-balanced lesson of men's co-operation with God. As Gerald R. Cragg estimates, "Tillotson was dead, but his sermons were the ethical handbook of the new age, and on this point he was perfectly explicit."

The formation of Fielding's ethical view may be attributed to this one-sided reception of Tillotson's sermons. Judging from his learning, however,

it is difficult to say that Fielding was influenced only by the public's opinions of Tillotson. He must have read Tillotson's sermons. In fact, he gave his own impression of Tillotson's sermons in *Joseph Andrews* and referred to the passage stressing the importance of faith (not works) in a *Champion* article. The conclusion drawn here is that Fielding's frequent neglect of the faith of the supernatural aid of grace is the result of his own intentional choice. Of all Tillotson's sermons, Fielding used only those which deal with the same ethical view as he tried to instill into the world of his novels. He was versed in the Latitudinarian doctrine, but he was also familiar with classics and British philosophy; all these elements are too intermingled with each other to be separated. So it would be a fatal mistake to try to understand the Latitudinarians, specifically Tillotson, only on the basis of Fielding's novels and essays. Most Fielding scholars have often been devoting themselves to discovering each source of his Latitudinarian passages; thus they are in danger of misunderstanding the real Latitudinarian view.